

激励の言葉（入学式 式辞にかえて）

新入生の皆さん、入学おめでとうございます。

城西大学付属川越高等学校を代表して、皆さんの入学を心から歓迎し、激励の言葉を贈ります。例年ですと、ここはお祝いの言葉です。しかし、突如として現れた新型コロナウイルスが猛威を振るうこの状況を顧みて、敢えて「激励の言葉」とさせていただきます。今年度は、入学式を行うことができないばかりか、皆さんの登校も叶わない状況が残念でなりません。これは、皆さんの健康と安全を最優先にした結果であるということをご理解ください。

私事ですが、感染症が及ぼすこのような状況への対応は、私の42年の教員生活においても、初めて経験するものばかりです。感染の拡大は、高齢の私にとって、恐怖と不安でしかありません。皆さんも不安感と焦燥感でいたたまれないことでしょう。そんな状況下でも時間は、刻一刻と過ぎ去り、私たちを待ってはくれません。英語に“Time and tide wait for no man.”という言葉がありますので、時間に対する思いや価値観には、国民性や宗教観によって違いはあるものの、現代の日本人と同じような認識を持っている人は、決して少なくはないと思います。時間はすべての人々にとって平等に過ぎていきます。過ぎてしまった時間は、取り戻せません。学校に来られないこの状況において、安閑として時間を費やしてはいけないと思い、今まで以上に1分1秒を大切にし、今、自分に何ができるかを考えてはどうでしょうか。新型コロナウイルスで亡くなった方は、すでに全世界で80,000人を超えています。アメリカでは、すでに1万人を超え、1千人を超えてからたった11日の間に10倍以上に増えたのです。とても恐ろしいことです。本校では、3月2日から休校になり、高等学校の卒業式も大きく形を変えて行い、附属中学の卒業式は、形を変えるどころか、登校さえ叶わなかったのです。しかし、恐怖や不安の中にあっても、泣き言や愚痴ばかりでは何の解決にもなりません。「言うは易く、行うは難し」とは、よく言った言葉で、今の状況を批判するのは簡単です。責任を人に転嫁させることも簡単ですが、見えない敵と戦うのは本当に難しいことです。見えないから実感が湧かないのです。だから本当に怖いのです。罹っても仕方ないとは言えないのです。今は、できることを確実に且つ丁寧にやることしかないと私は思います。ここは力を合わせて、知恵を出し合って、堪え凌がなくてはならないのです。世界中には日本国内を含めて多くの、優秀なそして勇気のある医師や科学者がいます。そして、その方々は、日々研鑽を重ね、研究を続けています。私たちにとっては、その方々が頼みです。ですから、私たちは今できることをしませんか。「手洗い」「うがい」「咳エチケット」は、すべての人が今からできることです。

今年度は、この入学式を含め、学校対応の一つ一つが初めてのことばかりで皆さんには、大変迷惑を掛けました。未だ収束の兆しは見え、今後の高校生活では、予定を立てたところで、変更を余儀なくされることもあると思いますが、どうかストレスをため込まない工夫をしながら、心豊かな高校生活を築いていくことを考えてください。私たちの新型コロナウイルスへの対応の良し悪しは、この目に見えない未知なるものの猛威が収束した時にわかる

ことでしょう。このことは、自治体や政府の対応についても同じように言えることですが、ただ、今の私に言えることは、私たち城西大学付属川越高等学校の教職員は、社会情勢、社会状況を鑑みながら、今できる最善の方法を採っていくという考えであることをわかってください。皆さんの信頼を得るためにも、私たちは、全力で皆さんを支えています。そして、人生において、最も大事な思春期の真ただ中にいる皆さんに、できるだけ早く学校という場所で学ぶ権利を回復できる日が来ることを心から願っています。

さて、今年度もこのように新入生として、皆さんを迎えることとなりますが、新入生の皆さんにとって、城西川越に入学するまでの経緯はさまざま、今の思いもまた一人ひとり違うことと思います。皆さんは、高校の3年間をどのように過ごそうと思っていますか。こんな状況下ですから、より一層、皆さんには、一人ひとりが自分の個性を発見し、充実した高校生活の中で磨き上げてほしいのです。

国から、「緊急事態宣言」が出された7都府県はきわめて厳しい状況下にあります。この混乱の真ただ中にいる私たちは、歴史の生き証人として、この事態を目に焼き付け、記憶と記録に努めていく責任があると思います。還暦を過ぎて5年。私は歴史の真実や重さについて、いささか安易に考えていたことに今さらながらに気がついた次第です。世界の、日本の歴史については、少なくとも、小学校から高等学校まで授業を受け、学んできたつもりです。歴史に関する書物も読み、学びましたが、思えば深く考えることなく、鵜呑みにしてきたというのが本音です。実のところ、英国人ジャーナリストのヘンリー・S・ストークス氏の著作に触発されたのが大きいのですが、まず、ここで、みなさんよく考えて下さい。人が語れば、その人の今の思いや感情が大きく作用するのは当たり前で、そこに書かれた数字や数値が事実としても伝え方ひとつで、伝え聞いた人の受け方で大きく変わるのもまた事実です。この事実は、誰にとってもごくごく当たり前のことですから、今ここで述べることではないかもしれません。しかし、印象操作などという言葉があるように、ネット社会と言われるこの時代に、生きていく上で、ネット上の情報が役立つことも否定しませんが、フェイクニュースなどには騙されてはならないのです。とても難しいことですが、この世に溢れるさまざまな情報に左右されない生き方が絶対に必要だと考えています。そのためには、それ相当の覚悟が必要です。真の知性と冷静な判断力が要求されます。自分の眼と心と頭を鍛え上げなければいけないのです。受け取る側にすべてはかかってくるのです。

東日本大震災の処理は、まだ終わってはいません。風化しかかって報道されないことがたくさんありますが、東京や埼玉に住む私たちは自分のことに追われ、なかなか目を向けられません。ならば、少なくとも私たちは、東日本大震災を教訓にし、今日の前にある目に見えないこの新型コロナウイルスという未知なるものに対峙し、身の回りに起こっている出来事や自分の住んでいる地域の様子に注意を払い、気づいたことを書きとめることも日本国民として、県民、都民として、きわめて重要なことだと思います。それは、歴史を刻むことであり、ひいては、社会貢献に繋がることでもあるのです。徒に時間を費やしてはいけません。今は、自分のできることを確実にしていきましょう。そういう姿勢が、みなさん自身の高校

生活の道を拓き、未来を創造することになるのだと思います。

新型コロナウイルスとの戦いは始まったばかりですが、この戦いには絶対に勝たなければなりません。人類の歴史は、感染症との戦いと言っても過言ではありません。人類は、「ペスト」や「コレラ」にも打ち勝ってきました。どんな時代にも、課題はあります。課題のない時代など存在しないのです。近代化の進んだ明治には明治の課題があり、それらは、国民が力を合わせて克服してきました。敗戦後の日本には、主権さえなく、それも国民の力で取り戻してきたのです。公害で汚染しつくされた日本がありました。しかし、それらも英知を結集して克服しました。人類、とりわけ日本人は、その都度、知恵を出し合って難題、難問を克服してきたのです。繰り返しになりますが、日本の未来は皆さんが創造していくのです。お父さんやお母さんがこれまで手塩にかけて育てあげてきた皆さんは、日本を背負って立つ大事な宝なのです。そんな皆さんの挑戦が今こうして始まるのです。

私たち教職員の究極の責務は、皆さんを大学に入れることではありません。7年後、10年後に、みなさんが、一人で生きていける、そういう人間になる手助けをすることです。高校生活は、人生の中で最も貴重と言える3年間であり、皆さんの心と脳が大きく育つ貴重な3年間です。しかし、生きることは楽しいことばかりではなく、つらくて苦しいことがたくさんあります。(もうすでに皆さんは、入学前に経験してしまいました。) だからこそ、私たちは、学校という場を何としても夢を持てる、かけがえのない場にしていきたいのです。

あらためて、入学おめでとうございます。この難局に対し、力を合わせてみんなで生き抜きましょう。

令和2年4月13日

城西大学附属川越高等学校 校長 田部井勇二